

FORUM

Vol.6

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第 6 号

CONTENTS

巻頭言 2

大阪府立大学工学部長・大学院工学研究科長 奥野 武俊

コラム 3

FDは義務？

高等教育開発センター主任 高橋 哲也

FDワークショップ報告 4

授業アンケート報告 6

—実施概要と試行的分析ハイライト—

「先導的大学改革推進委託」 8

(文部科学省委託調査研究) 報告

高等教育開発センター 10

2006年度活動報告

編集後記 12



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

巻頭言

● 大阪府立大学工学部長
大学院工学研究科長

奥野武俊

TAKETOSHI OKUNO

学問すること

以前、ある高校の進学指導の時間に、工学部の紹介をしてほしいと依頼されて出向いたことがある。高校生に話をしながら、彼らに“なぜ大学に行きたいのか”と尋ねたところ、将来の就職を考えて……という答えが最も多かった。そのために、工学部へ行けばどのような技術が身につくのか、どんな資格が取れるのか……というような質問が強くあることが分かりました。そこで私は、「工学部では、例えばロボットや携帯電話を作る技術は学ぶことができません！ でも、ロボットを作るための制御理論や、駆動させるモータ理論など、携帯電話はなぜ混信しないのか……などの原理を学んで、“学問”をします」と言いました。その意味を理解してくれたかどうか分かりませんが、大学に行っても先端的な技術やそれに関する知識は学べない、という言葉にショックを受けたらしいと、後で担任の先生が知らせてくれました。

大学は学問するところ……これは、私たちにとって当たり前のことだと思のですが、最近ではそんなことを簡単に言えない状況にあるかもしれません。「学問」という言葉がいつから使われているのかを詳しく知らないのですが、この単語は、「学」と「問」から来ていますから、疑問や質問を発して、問いながら学ぶという意味で使われ始めたのでしょう。ですから、なにかの知識を吸収することだけを意味している訳ではなく、問うて学ぶ……議論しながら、真理や原理に対する理解を深めることを意味しているのだと

思います。

大学に求められているのは専門性であるという言葉のもとに、専門家としてのスキルを身につけることが当たり前のような指摘や要求があり、学生達が……講義中に質問することはほとんど無く、自分の将来の就職を有利にするために大学院へ進むと公言する……ようになっていることを考えると、学問の面白さや楽しさを伝えたいと思ってきた者にとって、最近の様子は非常に心配です。彼らの中にあった素朴な疑問や質問は、何時、何処に捨ててきたのでしょうか？ 小学生の時にはあんなに多くの疑問や質問を教室で発していたのに……

ヘブル語では学ぶこと（知ること）をYadaといいます。これは“手で触ること”を意味します。これによると、学ぶという事は、知識を得て整理することではなく、手で触れて確認し、それを自分のものにする（一体になる）事を意味します。これは非常に大切な事なのですが、最近の日本の教育・文化はギリシャやヨーロッパからの大きな影響を受けて、頭で考える事を強調し、知識を得て、何かが出来るようになることが最も大切であるかのようにになっている気がするのです。

大学教育において、学問する楽しさや喜びを伝えることが出来る事を心から願っています。それが出来れば、たとえどんな困難に出会っても、それを乗り越えることが出来ると思うのです。真理や原理に触れたなら……きっと出来るはずですよ。

FD は義務？

大学院設置基準が19年度4月から改正され、大学院ではFD（ファカルティディベロップメント）が義務化されます。今回の改正では、「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」（第14条の3）の部分がFDの義務化

と呼ばれています。これだけ

読むととりあえず研修（と称した講演会）をやっておけばいいと思われるかもしれませんが、この条文の前の第14条の2では、

「大学院は、学生に対して、授業及び研究指導の方法及び内容並びに一年間の授業及び研究指導の計画をあらかじめ明示するものとする。」「大学院は、学修の成果及び学位論文に係る評価並びに修了の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。」とあり、こちらの方がより重要だと思われます。

大学院のFDなんて学部でも出ていないのに実感が湧かないという方もおられると思いますが、学士課程でのFDの義務化もより強い形で20年度から法制化されそうだと報道されています。全教員の研修が義務づけられるとか聞くとあまり気分の良いものではありません。個人的には、FDの義務

化という方法で教育が良くなるかということに疑問を持っていますが、義務化しないと仕方がないという大学教育への不信感が背景にあり、この点については大学で教育に関わる人間は多いに反省すべき点があると思います。（大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策についてー競争的環境の中で個性が輝く大学ー」（別紙2）など参照。中教審、大学審議会の答申は大学教員なら一度は読まれることをお勧めします）

FDという言葉を意識せずに教育を良くしようという試みは全ての教員が行っているはずです。その試みを学科・学部といった教員集団（Faculty）で共有し、組織的に教育課程・方法を組み立てていくのがFDのはずです。義務感からやられるのではなく、大学院・学部教育を良くするためには何が必要かということを真剣に議論して府大のFD活動を考えていく必要があるのではないのでしょうか。

（高橋）



第1回

FDワークショップ報告

高等教育開発センターでは、新たに、「相互研修型」（参加者も作業するワークショップ、相互授業参観）の活動を展開しています。昨年11月25日に、課題テーマについて、参加者がグループで討論した結果を発表する「第1回FDワークショップ」を実施しました。今回は、すべての学部の全学科から各1名、合計29名の教員が参加し行われました。

第1回FDワークショップのテーマとして、「GPAのもとでの成績評価」を取り上げました。GPA制度は、新大阪府立大学発足の平成17年度から取り入れられた制度です。教員間での成績評価基準の差、学部・学科間でのGPA値の差などの問題点にどう対処していくかについて、参加者は、グループごとに議論を行いました。ワークショップは、第1部と第2部からなり、第1部では、主催者側からのGPAについてのレクチャーのあと、GPA制度のメリットとデメリットを踏まえたうえで、本学においてGPA制度を今後どのように運用していくべきかについて、議論の結果を発表しました。第2部では、第1部の結果を踏まえ、3種類の科目設

定（教養科目、少人数演習科目、専門科目）のうち、それぞれ1つの科目について、成績評価案を作成してグループごとに発表しました。

終了後に回収したアンケートによれば、参加したほとんどの教員がワークショップについて有意義であったと回答し、参加者の6割がGPA制度と成績評価についての認識が変わったと回答していました。また、意見・感想の欄には、他学部・他分野の教員との議論が参考になったという感想が多く見受けられました。

高等教育開発センターでは、今後もFDワークショップを開催していく予定です。教員のみなさんの積極的な参加を期待します。

（川添・高根）



FDワークショップに参加して

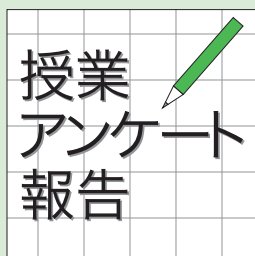
牧岡 省吾 (人間社会学部 人間科学科)

正直に言って、土曜日の朝から夕方までを費やしてワークショップを行なうことに疑問を感じながら参加しました。しかし予想はよい方に裏切られ、かなりの充実感を得て会場を後にすることができました。GPA・CAP制に関する方法論的な議論だけでなく、「そもそも教養教育とは何か」といった本質的な問題に関しても、率直に議論することができたからです。多様な学科のメンバーで数人のグループをつくって議論するという方式も効果的でした。学問領域の違いによって異なる点、共通する点などが明確になったと思います。今回のワークショップには各学科の教育運営委員が参加しましたが、委員以外の方々が参加する機会があってもよいかもしれません。



宮本 健助 (理学部 生物科学科)

第1回FDワークショップが「GPAのもとでの成績評価」をテーマに開催された。これまでに開催されたこの教育制度に関する講習型セミナーとは異なり、ワークショップは異なる学部 to 所属する4～5名の教員集団によって「GPA制度の今後の運用」と「GPA制度のもとでの成績評価」という課題について検討し一つの提案としてまとめる形で進行した。教員が所属する学部(学科)の質的な違いや科目(教養科目と専門科目)の特性を反映し、長所と思われるものも立場を変えると短所とも成り多様な考え方が提示され、コンセンサスを得ることの難しさを感じるものであった。成績評価の等質性をいかに作り出すか、また、学生の履修に及ぼす影響などを考慮したGPAの利用環境をどのようにするかなど、制度的に機能を果たしていくうえで改善すべき点が多々あるようである。研修型であれGPA制度の適応的進化をめざし議論する場が与えられたことは、自分にとって、教育に対する意識改革につながる有意義なものであった。



—実施概要と 試行的分析ハイライト—

先般実施されました2006年度後期授業 アンケートについてご報告いたします。今回は下記の要領で実施されました。

対象科目: 2006年度前期開講科目

※1・2年生科目は全ての科目が対象、3年生以上（大学院生も含む）の科目は各学部（研究科）が指定した科目

回答期間: 2006年12月 18日(月)～2007年2月 16日(金)

※ただし集中講義の科目については別途設定

回答方法: 原則として学生ポータルを通じてWeb上で回答

※経済学部の一部の科目では紙ベースで実施

次に、全体と部局別の対象科目数・回答（延べ回答者数）の学年別構成比・回答率は表1の通りです。本来3年生以上が存在しないはずの理学部・人間社会学部に該当があるのは、表中の学部名が学生の所属ではなくアンケート対象科目の開設部局を表すためです。今回も1・2年次配当科目が主たる対象であったため、学年別では1・2年生の回答が、部局別では総合教育研究機構の科目および回答が多くなりました。また、回答率は全体で2割を切っており、前回の3割強からさらに低下しております。次回以降の回答率の改善方策については、教育改革専門委員会および高等教育開発センターで検討中です。

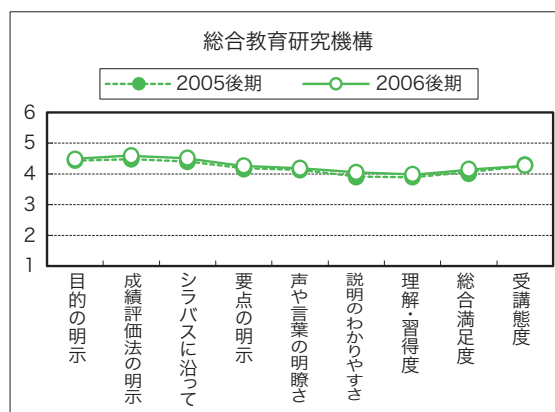
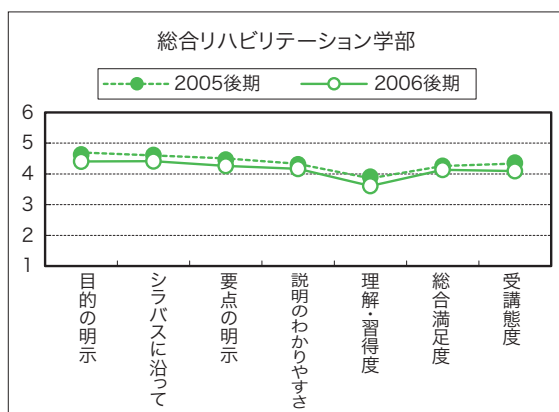
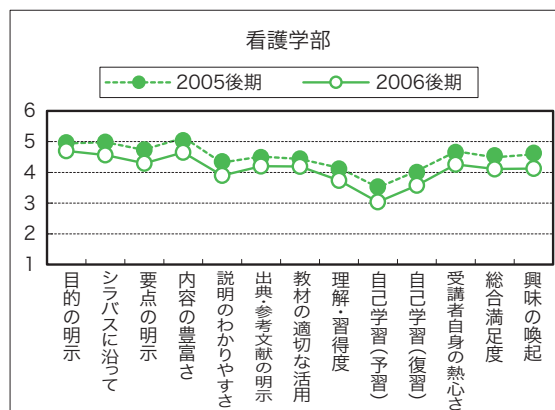
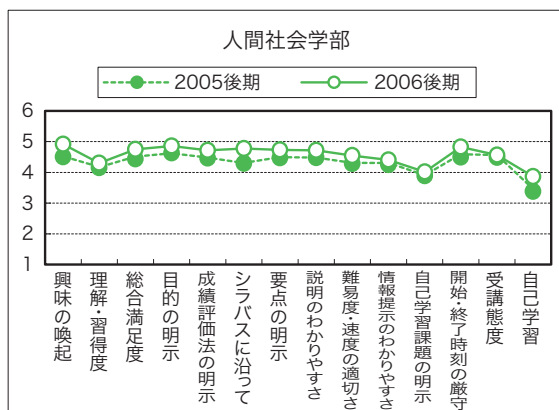
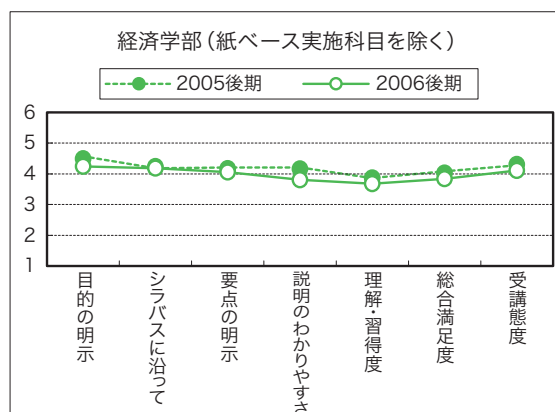
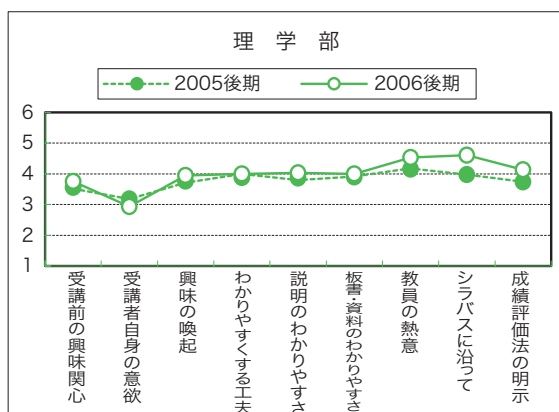
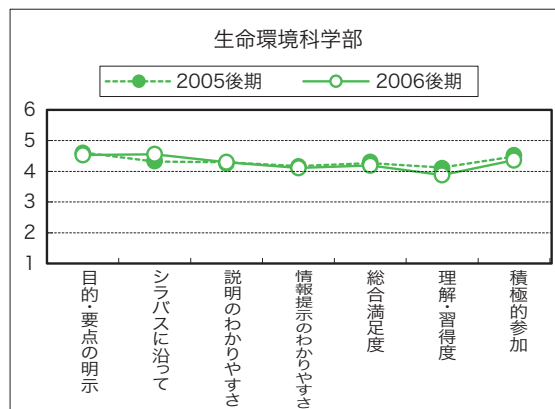
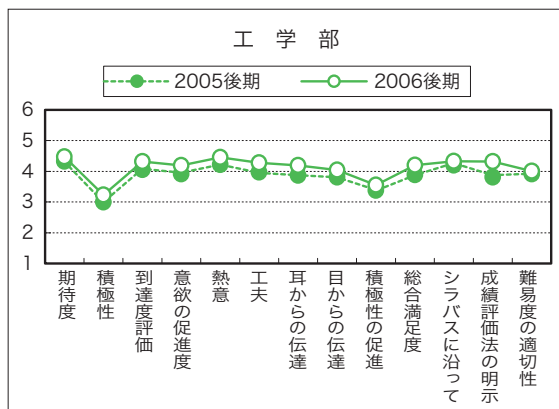
■ 表1 科目数・回答の学年別構成比・回答率

	科目数	1年生	2年生	3年生	4年生以上	回答率
全体	803	66.8	21.9	10.2	1.1	18.1
工	177	39.5	35.7	22.0	2.9	13.8
生命環境	79	42.6	42.6	8.7	6.1	10.1
理	66	26.7	67.7	4.0	1.6	22.6
経済*	36	54.0	31.4	6.9	7.7	9.2
人間社会	117	32.7	62.2	4.1	0.9	13.4
看護	26	26.0	51.8	2.5	19.8	19.9
総リハ	39	25.2	31.7	42.1	1.0	43.2
機構	263	86.6	12.7	0.5	0.1	23.1

※ 単位:% (科目数を除く)

* 学年別構成比・回答率は紙ベース実施科目を除く

さて、2005年度後期 から半期に1回実施してまいりました授業アンケートも今回で3度目となりました。2005年度後期 の必須対象は1年生科目だけでしたが、今回のデータから1年生回答結果を抽出することで比較ができます。もちろん、回答している学生も回答率も異なりますので厳密な比較にはなりません。学生から見て授業が改善されているかどうかのおおよその目安にはなるでしょう。以下、部局別に平均値の年度比較結果を示します（出席の度合の自己申告等、明らかに間隔尺度と見なせない項目は省略）。部局・項目によって差の出方に若干の違いはありますが、概して2005年度後期 と2006年度後期 で大きな変動はないようです。（保田）



「先導的大学改革推進委託」 (文部科学省委託調査研究) 報告

標記の調査研究について、前号では中間報告をいたしました。今回は調査の全体像をご紹介しますとともに、学生が府立大学を選択するにあたってどのような事柄を重視しているか等についてご報告いたします。

本研究では、大きく分けて4種類の調査を実施しました。それぞれ高校生・大学生・高校

教員・大学教員を対象としております。調査内容・対象の概要と対象者数は表1の通りです。今後、共同受託機関の大阪市立大学メンバーの先生方と報告書の内容について擦り合わせた上で文部科学省に提出し、遅くとも夏頃には最終報告書発行を予定しております。

表1 調査の内容と対象者

対象者分類	調 査 内 容	対 象 者 詳 細
高 校 生	学習の履歴・意欲・習慣など	大阪府および周辺府県の高校3年生 5,281名
	英語学力*1	// 1,812名
	数学学力*1	// 1,471名
大 学 生	高校時代の学習の履歴・意欲・習慣など	大阪府立大学1・2年生 1,127名
	高校時代の理科学習	// 1,039名
	ベネッセGTEC英語力試験	大阪府立大学生 1,487名 *2
	数学学力*1	大阪府立大学生(理系学部のみ) 794名 *2
高 校 教 員	大学教育(特に初年次教育内容)の認知度	大阪府および周辺府県の高校教員 359名 *3
大 学 教 員	高等学校における学習内容の認知度	大阪府立大学1・2年生対象授業担当教員 58名

*1 国立教育政策研究所「平成14年度教育課程実施状況調査」の公開問題も含む。

*2 1年生対象の授業で実施したためほとんどが1年生である。

*3 ほとんどが生徒調査対象校と重複。

府大受験を決めるにあたって重視した事柄を尋ねた質問の回答が図1です。「重視する」比率の高い順に、「学費が安い」35.0%、「大学の難易度が自分に適している」32.1%、「自分の興味を追求できそう」31.2%、「希望分野の教育が充実している」23.2%、逆に「ほとんど重視しない」が高いのは「教員の名前が世間に知られている」79.9%、「クラブ活動が盛んである」69.9%、「教員の研究内容に興味がある」59.1%、「自宅から近い」46.4%となっています。

府大受験を決める際の参考に関する質問の回答(複数回答可)が図2です。「高校の先生の意見」が最多で約4割、次いで「親や親戚の意見」が3割強、「塾(予備校)の先生や家庭教師の意見」「受験情報の雑誌やウェブサイト」が4分の1程度となっています。「何も参考にしない(自分一人で考えた)」も約4分の1います。

最後に、府大の満足度の回答結果が図3です。「とても満足している」「どちらかといえば満足している」を合わせると4分の3近くになる

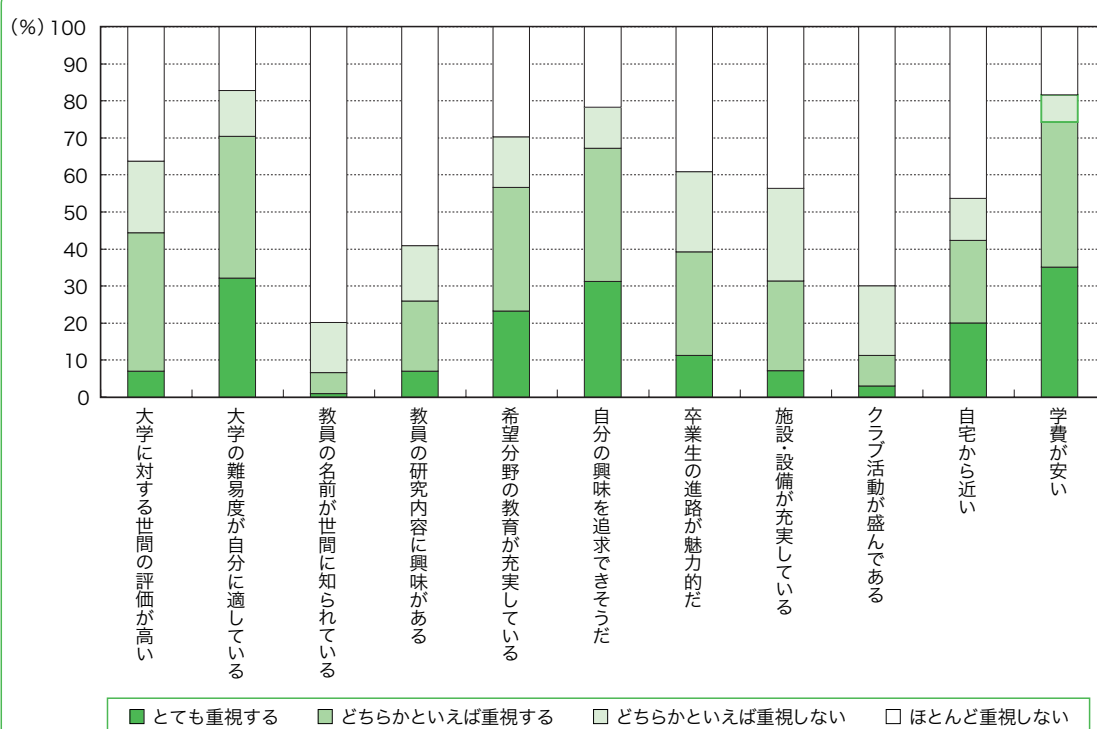


図1 府大受験を決めるにあたって重視した事柄

一方、「あまり満足していない」または「まったく満足していない」も約1割存在します。図は省略しますが、所属する学部・学科の満足度で

は、「とても満足している」が約36%いて、大学への満足度での該当者比率30%よりもやや高くなっています。（保田）

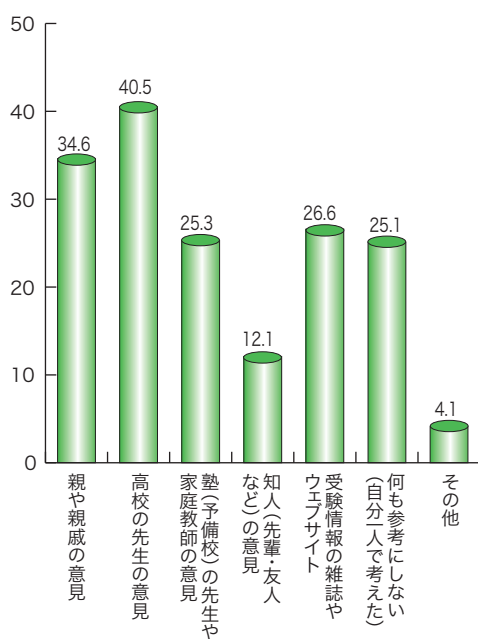


図2 府大受験を決める際の参考

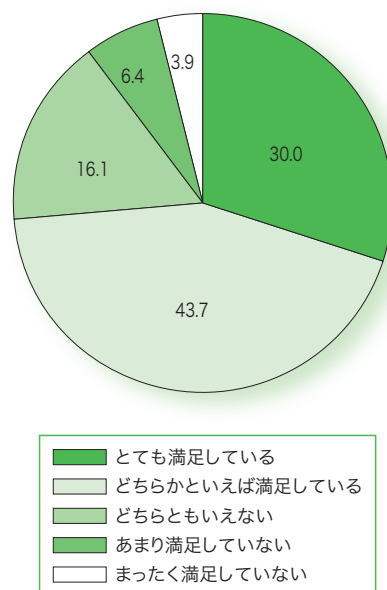


図3 府大の満足度

高等教育開発センター

2006年度活動報告

セミナー・研修会の企画・実施

◎FDセミナー

FDセミナーを2回開催しました。本年度は2回とも、遠隔講義システムを用いて、羽曳野キャンパスと結んで開催され、また新たな試みとして、学生の皆さんにも参加してもらいました。第1回は、学生発案授業の実現など、学生たちが主体的・積極的に参画している教育改善の先進的な取り組みについて、岡山大学教育開発センターの橋本勝先生に講演をしていただきました。第2回は、2006年7月～8月に全学で実施した「授業アンケート」に関して、高等教育開発センターから結果報告を行ったあと、このアンケートにおいて学生の満足度・理解度の高かった3人の教員に、事例報告として、日頃の授業の工夫等について具体的にお話しいただきました。

◎FDワークショップ

はじめての企画として、11月にFDワークショップを開催しました。GPA制度のもとでの成績評価のあり方について、活発な議論が交わされました。

◎新任教員研修

新しく着任された教員に対して、大阪府立大学の理念や教育方針、ならびに教育体制について、周知徹底をはかるための研修会を実施しました。

セミナー・研修会	内 容	年 月 日
第1回FD セミナー	「『学生参画』による教育改善システム」(岡山大学・橋本勝)	2006/5/15
第2回FD セミナー	「平成18年度前期授業 アンケート結果報告」 (保田卓) 「事例報告」(川本俊治、石垣智徳、林義孝)	2006/10/2
新任教員研修会	新規着任教員対象の研修会	2006/4/4
教育評価に関する懇談会	「岡山大学の教育評価」(岡山大学・橋本勝)	2006/5/16
FDワークショップ	「GPAのもとでの成績評価」	2006/11/25

調査の実施

◎授業アンケートの実施と分析

本年度前期開講の授業に関しては2006年7月 10日～8月11日に、また後期開講の授業については2006年12月 18日～2007年2月 16日に、それぞれ全学的な授業アンケートを実施しました。アンケートの結果については、各科目の担当教員のコメントを添えて、ホームページ上で学内限定にて公開します。アンケートの分析結果の概要は、前期分については本誌第5号に、また後期分については本号に掲載しています。

印刷物発行

◎センターニュース発行

昨年度に引き続き、今年度もセンターニュース『FORUM』を3回発行し、学内の全教員に配布したほか、他大学のFD関連センターや大阪府内の高等学校にも送付しました。

名 称	内 容	発 行 月
「フォーラム」第4号	FD探訪（総合教育研究機構第二教室初修外国語担当教員によるPodcast）、「先導的大学改革推進委託」（文部科学省委託調査研究）など	2006/7
「フォーラム」第5号	「平成18年度前期授業 アンケート」報告、「先導的大学改革推進委託」中間報告など	2006/12
「フォーラム」第6号	FDワークショップ報告、「平成18年度後期授業 アンケート」報告、「先導的大学改革推進委託」報告など	2007/3

所員派遣

FD関連のシンポジウム・セミナー・講演会・会議への出席、他大学の視察、および学外への講師等の派遣を行いました。

派 遣 先	派 遣 内 容	派 遣 者	年 月 日
第8回大学評価セミナー「今、求められる導入教育・リメディアル教育とは ―高大連携による学生の学力支援と認証評価におけるその評価手法―」（東洋大学）	講演会出席	谷口	2006/6/10
シンポジウム「大学批判の古層を考える」報告（京都大学）	シンポジウム出席	保田	2006/6/21
関西工学教育協会機械分科会平成18年度第1回研究会（千里ライフサイエンスセンター）	講演 （講演題目：「大阪府立大学のFD活動 ―大阪府立大学高等教育開発センターの活動を中心に―」）	高橋	2006/8/7
第6回山形大学教養教育FD合宿 セミナー（山形大学蔵王山寮）	セミナー参加	高橋	2006/8/8-9
特色GP採択記念 シンポジウム「初年次教育を活用した教育改革の可能性」（関西国際大学）	講演会出席	佐藤	2006/9/5
平成18年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム」（パシフィコ横浜）	講演会出席	高橋	2006/11/13
第4回FD シンポジウム「大学教育に役立つ評価 ―GPA、授業評価の活用方法とその実践」（法政大学）	講演会出席	保田	2006/11/18
平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム」単独フォーラム（大阪国際交流センター）	講演会出席	高橋	2006/12/4
第3回専門分野別教育開発セミナー「科学リテラシーと理系導入教育」（金沢大学）	講演会出席	高橋	2006/12/10
関西地区FD連絡協議会（ウェスティン都ホテル京都）	会議出席	山口、高橋	2007/1/13
第80回関西工学教育 シンポジウム（大阪府立大学）	パネリスト	高橋	2007/2/6
国際シンポジウム「教育評価としての学生調査」（同志社大学）	講演会出席	保田	2007/2/27
第12回FD フォーラム（大学コンソーシアム京都）	講演会出席	高橋、川添、谷口	2007/3/3-4
大学評価学会第4回全国大会（龍谷大学・大宮学舎）	講演会出席	谷口	2007/3/17
国際シンポジウム「国際標準の学部初年次教育実現へ向けて」（東京大学・駒場キャンパス）	講演会出席	山田	2007/3/26
第13回大学教育研究 フォーラム（京都大学）	講演会出席	高橋、保田、高根、谷口	2007/3/27-28
大同工業大学	視察	保田	2007/3/27

（谷口）

編集後記

高等学校学習指導要領の改訂により、新指導要領で教育を受けた高校生が平成18年度より大学に入学しました。それと前後して、「接続教育」や「初年次教育」に関する問題があちこちで論じられています。本学においても大阪市立大学と連携して、文部科学省の委託で「初年次教育の在り方に関する調査研究」をおこなっているところです（『FORUM』第4～第6号を参照）。

高等教育開発センターのスタッフも、この調査に参加していますが、学力の低下・学生の多様化が叫ばれている現在、「接続教育」や「初年次教育」という新たな問題は、FD活動とどのように関連してくるのでしょうか。また、学生の多様化はFD活動のさらなる多様化をもたらすことになるのでしょうか。

（山田）

大阪府立大学 高等教育開発センター
センターニュース『FORUM』

平成19年3月29日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
総合教育研究機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

〈編集委員〉川添 充 高橋 哲也（主任） 高根 雅啓 谷口 栄一 保田 卓（副主任） 山田 義顕 本吉 紀子（事務担当）

この冊子は1500冊作成し、1冊あたり65円です。